



発行所
網走南ヶ丘高校
新聞局
発行責任者
我妻孝介

100周年
特集

「文武両道」 受け継がれる南ヶ丘

網走南ヶ丘高校は今年の11月に創立100周年を迎える。100年という時の中で様々な変化があったと同時に受け継がれてきたものもある。
そのような節目の年に改めて南高を見つめなおし、より深く知っていくために、報道局は、現2年次生6名、第一・第二・第三中学校の3年生そして本校卒業生である秋葉先生に取材を行った。

イメージと違う？ 2年次生が語る

南高への思い

南高にきた理由
どうして彼らは南高に入ることを選んだのか、その理由を聞いてみると「南高では自立して1人で生きていける力をつけることが出来るから」「南高の先輩方がしっかりとしていて、自分を持っていくから」「進学校だから」などと答えてくれた。また、様々なイベントやホームページなどで南高の部局活動を知り、その部局に入ることを目的として入学した人も少なくない。

入学後—変わる印象

次に、入学前の南高の印象を質問した。ほとんどの人が「頭が良い」「真面目な学校」という印象を持っ



▲今年度の南高祭の衣装

いた。好印象が多い一方で改善してもらいたいこともいくつか挙がった。例えば「ボロシャツの裾が短すぎる」「校舎が全体的に老朽化しているので修理してもらいたい」と高校生ならではの不満があった。
1年を過ごして
南高に入学して良かったと思うか、これには6人全員が「良かった」と答えた。その理由とし最も多かったのが「新しい友達が出来たこと」だった。他にも「南高祭で一から自分たちで衣装を作ったり、露店などを楽しんだこと」さらに体育祭や部活に加えて各年次、年に数回行われるレクリエーションなどがとても楽しいという意見もあった。

は満場一致

学力・部活動・行事のレベルに圧倒

網走市中学・高校交流会

校舎に入り

6月12日に本校の会議室で「網走市中学・高校交流会」を行った。交流会に参加してくれたのは第一中学校の高畑純音さんと宮本温光さん、第二中学校の山内美乃さんと大西麻彩さん、第三中学校の石井宏樹さんと千葉土楓さんの計6名。報道局は中学生6名と南高についてと網走の未来について語って

交流会始まる

交流会に参加する中学生たちは入ったこともない部屋に案内され、初めて他校の中学生と会ったこともあり緊張していた。緊張をほぐそうと報道局はアイスブレイクとして2人1組で自己紹介をしてもらった。5分ほど話うちにお互い打ち解け、時間を延長するほどに熱心に質問しあった。アイスブレイクが終わったころには、6人の顔に笑顔が見られるほどに場はなごんでいた。



▲左から大西さん 宮本さん



▲左から石井さん 高畑さん

また、入ったことがないという石井さんと山内さんは、「雰囲気がある学校。部活の声が多く聞こえ、頑張っていると感じた」「すごく部活動が盛んでよいと思う」と初めて南高に入った感想を伝えてくれた。グラウンドで行われていた練習やフエンスに掲示されている横断幕を見て部活動が盛んという印象を受けた人が多いようだ。

南高のイメージ

次に、南高について知っていることはあるか質問すると、大西さんは「ホームページや姉から聞いて学習面、レベルが高い」という事を知っていた。また「行事のレベルが高」と石井さんは言う。「中学校で南高祭やそういつた行事があまりできなかったの、今から楽しみ」とこの

と、同じく高畑さんも行事、特に南高祭を楽しみにしている。「衣装を自分で作るの、がすごいと思う。南高祭が盛ん」というイメージがある」と南高祭のことを話してくれた。南高祭などの行事を楽しみにしているという意見は高校2年生からはあまり聞かれなかった。3年間の中学校生活で、新型コロナウイルスの影響により行事などが通常通りに行えなかったことが関係していると考えられる。さらに高畑さんはホームページに掲載されている部活動の大会結果を見て部活動が盛んという印象も持っている。山内さんや千葉さんは「学力・運動なので文武両道」「進学校」というイメージがある。南高へのイメージを話して



▲左から山内さん 千葉さん

交流会に参加した
生徒を紹介

第一中学校

たかはたあやね
高畑綾音さん

音楽を聴くのが好き！

第二中学校

みやもとあき
宮本温光さん

バスケット部員であり生徒会副会長

第三中学校

おおにし まや
大西麻彩さん

美術部に所属

山内美乃さん

バイオリンとダーツが好き

石井宏樹さん

ゲームが得意

千葉土楓さん

剣道部所属、仮面ライダーが好き

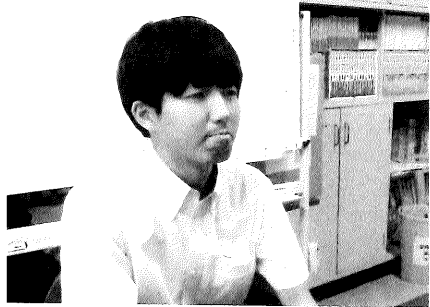
平成 27 年卒業

秋葉先生へ取材

「伝統は人が創るもの」

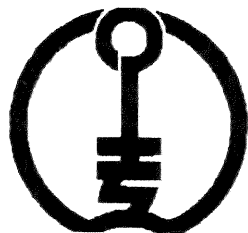
最初に先生がどうして南高に入学しようと思ったかその理由を尋ねた。「(自身が通う)網走第一中学校と南高が隣に位置していたこともあり、いつも南高を見ていた。そしていつか高校生になった時にはあの学校にいたいと思っていたから。また、当時から教師を目指しており、そのためには大学へ進学しなくてはならないと感じていた。大学に行くとなると進学校である南高へ行きたいと考えて受験した」と語った。

入学前と後で南高への印象はどう変化したのか質問すると「入学前から進学校であるというイメージは強かった。しかし、入学後南高の部活動の強さを知り、同時に宿題とテストの多さに驚かされた」という答えが返ってきた。では、当時の南高と今の南高で変わったところと変わらないのはどこか尋ねると「靴箱やジャージが大きく変わったことと進学生徒が増えたこと、部活動がより強くなっている



▲網走や南高について語る秋葉先生

変わらないで—そのあたたかさ



私たちのまち

網走

能取湖のサンゴ草群落 秋



「網走に20年後どのような街であってほしいか」最初にこの質問を現2年次生にしたところ、網走の自然の繁栄を願う答えが多かった。具体的には「海がきれいになってほしい」「流水の量が増えてほしい」「流氷の量が減ってほしい」「サンゴ草が枯れないでほしい」と現状維持を望む答えもあった。一方、過疎化が進んでいることを心配する人もいた。「いつか自分が網走に帰ってきたときに、廃れて変わってしまったと思いたくない。きつと学校の数も減ってしまうだろうから南高には網走市民から愛され続けてほしい」と南高と網走の関係も考えながら語ってくれた。

開校 100 周年記念
報道局特別連載企画

南高 あの前輩に学ぶ 第2回 「将来像持つことが重要」 ダンサー目指すも講師へ



ポリシヨイバレエ学校に入学後、バレエダンサーを目指して練習に励んでいた佐々木さん。しかしある時、バレエ界では致命的なケガとされる腰のヘルニアを患ったことがきっかけでダンサーの道は断念。そこで佐々木さんは、元々あった「講師として網走で本格的なバレエを教えた」という目標に切り替えたという。

中学生に「もし、網走に貢献できるとしたら何がしたいか」と尋ねた。ここでは高校生と同様に自然保護への貢献と人口増

網走への貢献

「網走は南高から元気をもらっている。南高生の挨拶や部活動を頑張っている姿は網走の市民を元気にする」と話したうえで、「自分が子どもだった頃と比べて商店街にシャッターが増えているし、思い出のあった店がなくなってしまうのは寂しい。しかし、網走が穏やかで過ごしやすく、時間を大切にできる町であることは変わっていない。このままであってほしい」と網走への思いを語った。



▲シャッターの下がった店 網走市 Apt. 4

加のためになる貢献をしたいと答えた。自然に関心を持って「網走湖と海をきれいにしたい」と話したことから、豊かな水資源に対する思い入れの強さを感じた。人口増加については「幼稚園・保育園などの施設を増やす」「公園を作ったり子どもたちが遊べるようにする」と未来の子供たちを思う回答をしてくれた。

今回の取材から、今の中学3年生も在校生や卒業生が入学前に南高に対して持っているもの、とほとんど同じ印象を持っていることがわかった。南高のかかわりが薄い人から見た印象は昔から変わっていないということがある。頭が良い所や、勉強、部活動ともに熱心に取り組んでいるなどのイメージは長年変わっていない。

最後に佐々木さんから「勉強や部活で忙しいと思うが、大まかでも、途中で変わってもいいので将来像を持ち、とにかくアクションを起こしてほしい。また、親や友達に合わせて行動していると、何でも他人のせいにする人間になってしまう。自分で考えて行動することが重要」とメッセージをいただいた。

資金集めのため市内で働く一方、スタジオ運営に関する勉強を続けるなど多忙な生活を送り、2020年、ついにバレエスタジオを設立。今は、生徒の意欲が見えた瞬間が一番うれしいという。



▲佐々木さんが代表を務めるバレエスタジオ

実践する力を養う」という南高の教育目標が達成されていると、中学生や市民は感じていることも判明した。そのような豊かな心を持つ南高生は網走についてよく考え、行動や貢献することが出来るだろう。

特集を終えて

100周年という節目の年に南高を見つめなおそうという目的でこの企画は始まった。この新聞が南高により興味を持ち、誇りに思えるきっかけになればと思う。